

一〇〇点について知ったこと

深町 梓紗

「見て見て。一〇〇点とったよ。」

そう言って、小学生の妹が見せてきたのは、大きな花丸がついた算数のテスト。私の家族は当たり前のように「すごいね」とほめるし、もちろん私もほめる。そのとき私はふと考えた。『一〇〇点』の価値について。

私は小学生のころ、それなりに点数は高かった。一〇〇点に届かなくても、九〇点代がほとんどだった。確かに一〇〇点はすごいことだ。一〇〇点をとることで、クラスではすごいと言われて、自分の気分もよくなる。そしてほめられて、期待される。誰にとっても一〇〇点は、基準であり大きな価値である。九九点だったとき、「頑張ったね」より「次は一〇〇点がいいね」という言葉をよく聞いた。自分の中でもそうだ。「うれしい」より「一〇〇点がよかった」と思ってしまう。それは、自分にとっての一〇〇点の存在が、価値が大きいからだろうか。

しかし、よく「私一二〇点」「一五〇点」「一〇〇点で満足しない」「常に一〇〇より上を目指せ」などという言葉は耳にしないだろうか。友達と話したことはないだろうか。つまり、ここでは一〇〇点の価値が小さく、満足してはいけなく感じる。私が思うに、一〇〇で満足するなどというより油断をしてはいけないということではないだろうか。絶対にとることができない一〇〇点以上を目指すことで、常に全力を出すことができる。つまり、油断したり甘く見たりすることで、一〇〇という価値を勝手に下げてはいけなく考えたのである。このことから、目標を高くかかげる必要性を感じるようになった。

今回考えたことで分かったことは、とれたらすごいから価値が大きいのではなく、甘く考えずに挑戦し続けることができるから、一〇〇点の価値は大きいということ。一〇〇点は、私にとって挑戦し続けるべき値だということ。あくまで私の考えに過ぎず、共感しにくいかもしれないが、一〇〇の価値は大きく、更に下げやすいということが結論である。私にはもうすぐテストがある。もちろん目標点数は一二〇点だ。